

神奈川県・私立関東学院中学校高校

教育ビジョンを軸とした学校改革

自校の特色の可視化に向け、「STREAM教育」の名の下、既存の教育活動を整理するとともに、活動の改善も推進



学校概要

- ◎設立 1919 (大正8) 年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約250人
- ◎2021年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、東京外国語大、東京工業大、東京大、東京都立大、神奈川県立保健福祉大、横浜市立大などに20人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ721人が合格。

変革の背景

「古くて新しい」取り組みを
教育のビジョンとして可視化

2021年夏、神奈川県・私立関東学院中学校高校は、新たな教育ビジョン「OLIVE」を打ち出した。「OLIVE」は、聖書の中で平和の象徴とされる植物で、同校の校章のモチーフであり、「STREAM」は、STEAM教育(*)に、同校の建学の精神であるキリスト教(宗教・Religion)の「R」を加え、「E」は英語(English)を前面に出したものだ。そのビジョンの下、自然科学や工学、数学に関する幅広い知識、

グローバル人材に必要な語学力や教養、キリスト教精神に基づいた宗教観など、混迷の時代を生き抜く資質・能力を育むという教育方針を示した(図)。

同年4月に赴任した森田祐二校長は、新たなビジョンを打ち出した意図をこう語る。

「着任して課題に感じたのは、発信力の弱さでした。本校が伝統的に行ってきた教育活動の多くが、これからの社会で求められる資質・能力を育成する活動でしたが、それらは外部にほとんどアピールされていませんでした。まずは本校の『古くて新しい』取り組みを整理し、外部に打ち出そうと考えました」

例えば、「STREAM」の「A」にあたるリベラルアーツ教育として、放課後に希望

者が無料で受講できる、中国語・韓国語、茶道・華道などの教養講座を長年行っている。いずれも専任講師による本格的なレッスンで、茶道・華道は免状も取得できる。また、1952年創部のマーチングバンド部を始めとする音楽系の部活動が盛んで、生徒のおよそ6人に1人が音楽系の部に所属している。

建学の精神であるキリスト教主義に基づく宗教教育にも力を入れてきた。週2回の礼拝や、週1回の宗教の授業など、国際理解に欠かせない宗教観を育んでいる。

「宗教に関する教養がないビジネスマンは、国際社会で通用しないと言われています。また、国内の外国人労働者数は増加傾向にあります。宗教の知識・理解は、多様性を受け入

* STEAMは、Science、Technology、Engineering、Art、Mathematicsの頭文字で、科学、技術、工学、芸術を始めとする文化的教養、数学に重点を置いた教育、人材育成のこと。

図 教育ビジョン「OLIVE STREAM」

Science

- ☆5つの理科実験室
- ☆実験重視のカリキュラム
- ☆ハワイ島理科研修
- ☆関東学院大学との連携
- 6年一貫のサイエンスリテラシー教育

Technology & Engineering

- ☆技術の授業
- ものづくりとプログラミング
- ☆「協働」する力を養うオリジナル教材
- ☆「手を動かす」こととICTの連携

Religion

- ☆宗教 キリスト教（プロテスタント）、校訓「人になれ 奉仕せよ」
- ☆礼拝
- ☆キリスト教に基づく学校行事
- 真の国際人として宗教観を身につける

English

- ☆4段階の英語教育 オンライン英会話、ベルリッツメソッド、英会話（チーム・ティーチング）、英語授業改革（コーチングメソッド）、海外研修、検定試験
- 大学受験でも、海外でも通用する英語力を身につける

Art

- ☆リベラルアーツ 茶道・華道、中国語・韓国語（課外授業）
- ☆芸術 陶芸室完備
- ☆35の部活動 音楽系部活動が盛ん

Mathematics

- ☆数学 基礎の徹底と演習、先取りは最小限、数学嫌いをつくらない、こまめな小テストとケア
- 大学受験の先まで見据えた数学的思考力の育成

☆は既存の取り組み、•は改革してきた取り組み。
※学校資料を基に編集部で作成。

一人ひとりを大切にする対面重視の教育活動とICTの活用
2学期制・週6日制（年間授業数35週＋定期考査・学校行事）、豊富な授業時間とゆとりのあるカリキュラム

自分らしい進路決定・目標達成のための力、自分の力を他者とともに用いるサーバントリーダーの育成

変革の一手

英会話の授業やネイティブとのオンラインレッスンで英語4技能を育む

新たなビジョンでは、ここ数年の社会の変

れられる社会人になるための必須の教養と言えます。6年間、キリスト教をベースに系統立てて宗教を学ぶ経験は、生徒にとって大きな財産になると思っています」（森田校長）

化を見据えながら改善してきた教育活動を、改めて学校全体の取り組みの中に位置づけ、その価値を再認識するといったねらいもあった。進路進学指導委員長の武田剛昌^{よしまさ}先生は、次のように説明する。

「本校の学習指導・進路指導は、学年団や担任の裁量に任されている部分が多いことから、教師が新しいことにチャレンジしやすい半面、よい取り組みが継承されにくいことが課題でした。また、伝統校として安定した生徒募集が行えてきたためか、学校全体とし

ては、社会の変化に応じた動きが鈍く、このままでは遅かれ早かれ、受験者数の減少に見舞われるのではないかとという危機感がありました。そうした課題意識や危機感を全教師で共有し、同じベクトルで改革に取り組み土壌をつくるためにも、新しいビジョンが必要でした」

新しいことにチャレンジしやすい同校の環境を生かし、15年度から、英語教育においては「話す・聞く」力の育成を強化している。中学1年生〜高校2年生では、6単位の英語の授業に加えて、英会話学校の講師による英会話の授業を2単位、正課に組み入れている。さらに、高校1年生では週1回、始業前の30分間、ネイティブ・スピーカーとの1対1のオンライン英会話も実施（他学年は希望者制で実施）。英語4技能の育成を図る指導に転換した。

「スピーキングとリスニングの力は英会話の授業でも伸ばせるようになったため、英語のほかの科目では、文法事項の習得や長文読解、英作文などにもじっくり取り組ませています。また、生徒が英語の資格・検定試験に積極的に挑戦するようになり、それらの結果を活用した学校推薦型選抜や総合型選抜の合格者が増えています」（森田校長）

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

学年団

担任

高大連携を通じて、探究学習の質の向上と生徒の進路意識の醸成を図る

理数教育の充実も図っている。同校は5つの理科実験室を完備しており、中学1年次は理科の実験を週1回必ず行うなど、伝統的に理数教育に力を入れてきた。

近年は、充実した設備と系列校に大学がある強みを生かした取り組みを行っている。生物では、高校2年次の前期において1か月間、グループによる探究学習を実施。系列校の関東学院大学理工学部の大学教員3〜4人をアドバイザーとして招き、探究する課題の設定



写真1 探究学習の成果発表会には、大学教員が参加。大学教員からの専門的な指摘が、生徒の探究心をかき立てているという。

や実験などに対するアドバイスをもらいながら探究を進め、最後に、大学教員も同席する成果発表会を行う(写真1・2)。

「生徒が設定する探究の課題は、高校生ならではの柔軟な発想によるものが多く、興味深い探究になることが珍しくありません。そのため、理論上はありえないことを生徒が発言しても、大学の先生方は生徒を頭ごなしに否定することはなく、温かく丁寧に助言してくれます。多くの生徒がもっと研究を深めたという感想を述べており、大学と連携した探究学習によって、大学の学びへの期待感が高まっていることも感じます」(武田先生)



写真2 生物の探究学習の内容は、模造紙にまとめて発表した。写真は、ネベンテスアラータという食虫植物の酵素が、エビやジャガイモ、自身の組織などを分解できるかどうかを実験・考察した研究。



校長
森田祐二 もりた・ゆうじ
教職歴35年。同校に赴任して1年目。

進路進学指導委員長
武田剛昌 たけだ・よしまさ
教職歴12年。同校に赴任して9年目。理科(生物)。

生物の探究学習は、武田先生と大学教員との個人的なつながりから始まった取り組みだが、それによって大学と同校との関係が深まり、中学生対象の放課後講座の中に、大学教員による数学講座を設けることにもなった。物理でも、大学と連携する活動が検討されており、教科学習における高大連携が学校全体の取り組みに発展しつつある。

進路指導での高大連携では、既存の取り組みの刷新を進めている。これまでは、高校2年生が関東学院大学の研究室を訪問し、講義を受けたり、模擬実験に取り組んだりする「知のフロンティア」を行ってきた。それには生徒の進路意識を高めるねらいがあったが、単発の取り組みのためか、進路意識が十分に高まっていなと、同校の教師は感じていた。そこで、22年度からは、他の系列校と合同開催とし、開講数を文理合わせて30講座以上に拡充する予定だ。加えて、すべての講座でSDGsとの関連性を示すとともに、ワーク

※プロフィールは、2022年3月時点のものです。

シヨップを取り入れるなど、生徒の学習意欲を高め、主体的に参加できる内容に改める。

『知のフロンティア』は、これまで他の系列校と別日程で行ってきましたが、2校による合同実施にすることで、大学の負担を軽減しつつ、講座数の大幅な増加が実現しました。他校生と一緒に取り組むワークショップや実験が、本校の生徒にとっても、よい刺激になるのではないかと期待しています」（武田先生）

医師の卒業生との懇親会を通じて、早期から医学科進学への意識を高める

医学科志望者に対する支援体制も整備を進めている。同校では毎年、卒業生である大学生・社会人と生徒との懇談会を行っているが、18年度からは、医学科志望者を対象とした医師の卒業生との懇談会も実施。大学での学びについての話を聞いたり、受験勉強や面接試験のアドバイスを受けたりするほか、入試で行われる集団討論の練習も行う。

当初は高校3年生のみを対象としていたが、現在は高校1・2年生も加えて、医学科志望者を早期から支援している。低学年時から意識づけを図ったことが功を奏し、21年度は2人の生徒が現役で医学科に合格した。

「これまで、医学科志望の生徒への支援は、

教師が個別に対応してきましたが、1年次から卒業生との対話や入試に向けた集団討論の練習に参加することで、早期から医学科合格を目指す学習を積み上げられるようになりました。そして、実際に医学科に合格した先輩がロールモデルとなり、最後まで志望を貫く生徒が増え、21年度の実績につながったのだと思います」（武田先生）

一連の実績を踏まえて、21年度からは医学科志望者対象の「医進プログラム」をスタートさせた。医師による講演会や予備校講師による講習などを年間指導計画に組み込み、中学生や保護者にも参加を促した。今後は、医学科進学の支援に力を入れていることを外部に発信していく考えだ。

変革の成果・展望

点と点をつなげて1つの流れにし、取り組みの効果を相乗的に高めたい

一連の改革の結果、21年度大学入試では、東京大学や東京工業大学を含む国公立大学の現役合格者数が20人と、ここ十数年間で最多となる実績を出した。生徒募集では、22年度中学校入試の受験者数が、前年比500人以上も増加した。

「本校の教育を『STREAM』という形で整理し、分かりやすく発信したことで、中学生や保護者に本校の特色が理解され、中学校入試の受験者数の増加につながったのだと捉えています。改めて、外部への発信の重要性を感じました」（森田校長）

教師が自校の教育のあり方について話し合う場面も増えた。「STREAM教育」というビジョンがあることで、目線を合わせて議論する土壌が生まれつつある。

今後の課題は、教師の指導力の向上だ。教師同士が切磋琢磨し合う環境を整えるため、授業研究や模擬試験の分析などを組織的に進めていく。加えて、教育体制の体系化も課題だと、森田校長は語る。

『STREAM教育』により、本校の教育を整理することはできましたが、一つひとつの取り組みは点にとどまっておらず、それらがどのように結びついているのか、結びつけられるのかというところまでは、至っていません。個々の教育活動を学校の年間計画にきちんと位置づけて継続性を担保するとともに、それぞれがどのような目標につながるのかを明確にすることが必要だと思っています。点と点をつなげ、1つの『STREAM（流れ）』にしていくことで相乗効果を高め、教育力の底上げを図っていきたくと考えています」